図書だより

＜第45号＞
平成17年12月1日
呉工業高等専門学校
図書委員会

「ウィーンの郊外」

目　　次

【巻頭文】
「自主性を育てる図書館作りをめざして」……図書館長　野村　博昭　2
【第２回校内読書感想文コンクール優秀賞】
「花まんま」（朱川湊人著）を読んで……Ｃ１　貝原美智子　3
「夏の庭」（湯本香樹実著）を読んで……Ａ２　前　博之　3
「愚か者の哲学」（竹田青嗣著）を読んで……Ｃ３　濱本　光蔵　3
「戦争のつくりかた」（りぼん・ぷろじぇくと著）を読んで……Ａ５　山上　寛子　3
【第２回校内読書感想文コンクールを終えて】……選考委員・図書館長補　新美　哲彦　6
【留学生が紹介する外国の図書館】
「私の国の図書館を紹介します」……Ｅ３　チャンウィライ・ソムバット　6
【ブックハンティング】
「第２回ブックハンテングを終えて」……Ｍ３　原田　辰也　7
「ブックハンテングの魅力」……Ｍ４　菅原　喬史　7
【新任教職員の随想】
「あの頃ぼくらはアホでした」……電気情報工学科　田中　誠　8
「読書のすすめ」……建築学科　仁保　裕　8
【在外研究員報告】
「外国の図書館紹介」……建築学科　冨田　英夫　9
【新着図書10選】……10－11
【お知らせ】……11－12
1　図書館のホームページがリニューアルしました
2　平成16年度　図書館利用状況について
3　第３回呉高専文化セミナーについて
4　冬季休業中の長期貸出について
【編集後記】……図書館長補　堀口　至　12

巻　頭　文

自主性を育てる図書館作りをめざして

図書館長
野　村　博　昭

ひと昔前，図書館は，「知の宝庫」と呼ばれていた。情報のほとんどを書籍が担っていた時代，図書館は個人で集めるには限界のある，より専門的な資料の集まる場所として尊重されていた。しかし，情報の伝達方法の多様化に伴い，図書館がそのようなとらえ方をされる機会は急速に減少している。

マルチメディア時代の到来が，図書館の世界に及ぼす影響は大きく，コンピュータ化が加速度的に進む今日，様々な見解に配慮しながら図書館の役割について考える必要がある。

私は学校図書館の最大の役割は，学生が授業に参加するのみという受動的態度から，主体的に学習するという能動的態度へ発展するための手助けをすることだと思う。将来の専門技術者の育成を目的とするわが校においては，各分野の教科内容を反映させた資料選択が行われ，日々発展進化する技術に対応する最新の学術情報を収集，提供しなければならない。また，教授陣のためにも，授業の実践，研究に役立つ資料をそろえて支援することも重要である。

昨今，情報の増大化は爆発的であり，また，それを得るためのツール，メディア，システムも多様化し，それを利用し情報を収集する能力のあるものと，そうでない者との間には，格差が広がる一方である。

情報リテラシーという言葉はすっかり一般的になったが，この言葉はコンピュータを使いこなす能力と混同されることが多い。しかし，本来の意味は情報に対する認識，収集，伝達能力のことであり，図書館は，これを学ぶための格好の場所なのである。

図書館には，活字メディア，ＡＶ資料のほか，各種媒体によるサービスの窓が開かれており，学生にとって情報収集のためのもっとも身近な設備である。学術分野において，理系・技術系分野は，日々情報が更新される世界であるから，将来，社会でプロフェショナルとしての立場を担っていく本校生徒たちには，情報検索に習熟することもまた要求されるのである。

情報検索の効率化のために急速に進む電子図書館への移行に関しては，呉高専図書館前館長でいらした野村利英教授が積極的に取り組んで下さったおかげで，MathSciNet の他，外国文献の資料にアクセスできるデータベースも導入されている。是非有効に使いこなしてほしいものである。

少しでも優れた検索や保存のツールを開発して提供することは，図書館が行わなければならないもっとも重要なことのひとつである。しかし，図書館の資料構成の多くが視覚情報よりも活字メディアであるというのが現状であり，早急に書籍がなくなるとは考えにくい。極論を言えば，図書館はこの情報社会のペイパーレスの時代に逆行している存在とみなすこともできるのである。

図書館とは，目的の情報を入手するためだけの設備ではない。専門家により整備された資料，そして，その正しい秩序こそが生み出す独自の静謐の中で自在に「知を遊ばせる」ことのできる空間なのである。

若年層の活字離れが問題化されて久しい。ひとりひとりがパソコンを所有する時代において，日々増大する情報の検索手段として，電子メディアが最速かつ簡便であることは事実であり，彼らが活字を敬遠する傾向にあるのはやむを得ないともいえる。

しかし，活字を読むことは，非常に集中力を要求され，必要な情報だけをクリックして拾い上げる作業より，はるかに「考える力」を養うことができる。このことは，学生諸君の精神力，知性の発達に大きく係ってくることを強調しておきたい。

学生諸君はやがて巣立ち，社会の一端を担っていく。教育課程から解き放たれ，指導してくれる教師も不在になった時，各々を発展させてくれるものは，自主学習能力と意欲のみである。図書館を大いに利用して，自ら学習，習得する力を身につけていってほしい。

第２回校内読書感想文コンクール優秀賞

花まんま（第133回直木賞）

朱川　湊人　著

環境都市工学科１年
貝　原　美智子

私が今まで読んできた本のジャンルは，童話，伝記物，ハリーポッターシリーズだった。その他，ホラー，ミステリー，文学作品は，ほとんど読破していない。

直木賞作品を読むということで，自分が理解できるかどうか，最後まで読みきることができるかどうか不安だった。

しかし，この作品は，私にとってとても身近な事柄が，温かく，優しく，淡々と書いてあり，読み終えた後に胸の辺りがフワッと温かくなる様な優しい気持ちになった。

この本の主人公，兄やんこと俊樹は，三つ年下の妹との何気ない日常のふれあいの中から妹に対する愛憎（ほとんどは愛）をストレートに表現している。

私にも三つ年下の弟がいる。兄弟は，この弟だけの二人姉弟だ。弟が生まれた時の事は，よく覚えている。祖母と一緒に生まれたての弟を見た時，かわいいとかかわいくないという印象よりも，弟ができたんだと妙に冷静に感じていたことを覚えている。三歳ぐらいまでは，弟も本当にかわいかった。おぼつかない足取りでついてくる姿を思い出すと，とても愛らしく思えてならなかった。そんなかわいかった弟も小学校に入学する頃になると，「弟なんかいても，いいことなんか一つもない」と思うようになった。きっと姉というものは，この世で一番損な役回りなのだ。

そう思いながら，時にはほっとけなくて勉強教えたり，一緒にテニスをしたり，洋服を選んであげたり。してあげたくてしているのか，しょうがないからしているのか，よく分からない。でも，この前弟がクラブの先輩にいじめられたと聞いて，何もなくてよかったとほっとした。

「しょうがない。兄貴や姉貴というものは，きっと世の中で一番損な役回りなのだ。」

私はこの一文に，大変共感した。この作品に記されている，親子の関わりやいろんな人との関わりも，心に響くものがあった。

しかし「しょうがない。…」の一文は，今までの弟との何気ない日常を振り返るきっかけとなった。私が夜コンビニに行くと言うとついてきたり，晩ご飯の唐揚げの多い少ないでケンカしたり，私が買っておいたポテトチップスを，勝手に食べたことでケンカしたり。弟が出品した絵が表彰された時や，習っている書道で賞をもらった時，また，一生懸命練習していた少年野球でトロフィーをもらった時，自分の事の様にうれしかった。

よく分からないけれども，私にとって弟は口が悪くて面倒くさい嫌な男の子だけど，私が世話してあげないといけないなと思う，たった一人の弟だ。もし弟に何かあれば，すぐに駆けつけて手をかしてやろうと思う。「兄やん」と同じで，それは仕方がない。姉貴というものは，たぶん世界で一番損な役回りなのだからと，しみじみ思った。

「花まんま」の感想を母に話したら，少し意外なことを言われた。

「十六年生きてきたあなたの感想と，四十三年生きてきた私の感想とでは，ちょっと違うところがある。また何年かして何回かこの本を読み返してね。」と。

それがどういう意味なのか，今の私にはまだ分からない。でも少し気になるのでもう一回何年後かに読んでみようと思う。

夏の庭

湯本香樹実　著

建築学科２年
前　　博　之

「死」に対して人はどのようなイメージを持っているのだろうか。苛立つような恐怖感だろうか。逃げられないという絶望感だろうか。誰にだって「自分に死が訪れるなんて信じられない。」そんな気持ちを持っているのではないだろうか。しかし，生きているものには遅かれ早かれ必ず死が訪れる。それは分かっているはずなのに，人は未来ばかりを考えている。今，私が勉強をしているのも自分の未来のため。「本当にそれでいいのか？」この本は私にそんなことを問いかけてきた。それではまずあらすじを確認しておく。

「死」について疑問を持った子供達とおじいさんとの「観察」から始まった深い「交流」。得たものと失ったもの。それは少年達を大人へと成長させ，「生きる」ということを教えた。

私もこの少年達と同じように，幼い頃に身近な人の死を経験した。母の死だ。気がついたときには母は入院していて，なんとなくもうすぐ死んでしまうのではないかと感じていた。小さいなりに母の死を理解しようとしたし，理解しているつもりだった。しかし，実際は違った。医者に最後の言葉を告げられても，周りの人が泣いていても，私には分からなかった。母の体は目の前にあって，眠っているようにしか見えない。これをどう理解しろというのか。私の中の母の記憶といえば，母が仮退院で家に帰ってきたときに抱きしめてくれたのに，照れくさくて何も話せなかったこと，母が心臓マッサージをされている風景，そして最後の瞬間。私が鮮明に思い出すことができるのがこの後悔と苦痛の記憶だけなのだ。それこそが人の死というものではないだろうか。後悔，後悔，後悔だ。ああすればよかったとか，こうすればよかったとか，ああしたいこうしたい。もし母が生きていたらなんて何回も考えた。失って初めて大切なものに気づくとよく言うが，まったくそのとおりだ。一緒に話をするとか，ご飯を食べるとか，ケンカをするとか，そういう当たり前のことが本当に大切なものなのだと母が死んで気づいた。どうしてもっと，自分に母を刻まなかったのか。どうしてもっと当たり前な大切な日々を幸せだと感じることができなかったのか。みんなはどうだろうか。当たり前な日々をしっかり生きているだろうか。人はいつ死ぬか分からない。明日かもしれないし今日かもしれないし，もしかしたら１秒後かもしれない。ムダにできる時間なんてまったくないのだ。

「死」があるからこそ「生きる」意味を知ることができる。「死」とはなにかと問われると私は「後悔」だと答える。「生きる」とはなにかと問われると私は「刻むこと」だと答える。自分に他人を刻み他人に自分を刻みながらしっかり生きる。「死」を迎えたときその後悔を少しでも減らすことができれば。それがその人の生きた証となるのではないだろうか。私は今を必死に生きる。

愚か者の哲学

竹田　青嗣　著

環境都市工学科３年
濱　本　光　蔵

三年生になってから，「倫理」という教科を習い始め，哲学的なことを学ぶようになった。ソクラテス，アリストテレス，プラトンなど，何人かの哲学者の思想について勉強してきたが，この本は難しい哲学の言葉を分かりやすく説明している。僕が感想文を書くためにこの本を選んだのは，本の冒頭にあった，「これは，人生に疲れた僕が『生きる意味』を探して旅に出る物語です」という文章に引かれたからだ。中学生のころから，僕は「生きる意味」について疑問を持っていた。特に将来の夢もなく，毎日をなんとなく過ごしていた僕は，自分がなんのために生きているの分からなかった。

この本はいくつかの項目があって，それぞれが独立した内容となっている。その中でも僕の目を引いたのは，「ほんとうのこと」，「本当に絶望すること」という二つの項目だ。二つとも自分の体験と似ている所があって，共感が持てたからだ。

「ほんとうのこと」，土壇場で心の声を聞くことは，誰にでも経験があるのではないかと思う。この本では自分にとっての「ほんとう」が大切だと述べられている。ここでの「ほんとう」とは，目的は目標のことだ。ゴールなしには頑張って生きることはできないし，苦労しながら生きることの意味も見いだせない。将来の夢も特になかった僕が就職ではなく，進学の道を選んだのは，勉強がしたかったからではなく，同級生のみんなが進学を希望していたからだ。他人に流されて毎日を生きることは，目の前に見える水平線を一生懸命追いかけているようで，たまに虚しさを感じる。

「僕にはこれといった才能も能力もないけれど，とりたてて劣っているわけでもなかった。生きている実感や手ごたえが全く感じられず，そのことが少しずつ僕を絶望させていった」これは「本当に絶望すること」の中にある文章だが，今の自分の状態そのものであったので，一番印象に残っている。僕が絶望するのは，常に自分自身に対してであり，そのことが更に「生きる意味」を失わせていった。人が深く絶望するのは，不合理なほど

自己理想が高くなる場合らしい。確かに，自分よりも格段に優れている人に出会い，自分の才能に絶望したことはある。

僕は自分の生き方が嫌いだ。その考えは今も変わらない。しかし，少し違う観点から「生きる意味」を考えることができるようになったかもしれない。僕は長期休暇を利用して，短期のアルバイトをしたことがある。その時の職場には，自分と同年代なのに，既に一人暮らしをして自立している人，30歳を超えても，フリーターとして生活している人，多くの仕事を解雇され，職を転々としている人など，色々な人がいた。普通すぎる僕の人生と違って，つらい過去や厳しい現状がある人もいた。その人たちを見ていると，まだ高校生の段階で，人生に絶望するのは早すぎるような気がした。自分にもまだ可能性があるように思えてきた。

動物の「生きる意味」は種の存続だろうが，人間にとっての「生きる意味」はそれだけではないように思える。それが何なのかは，正直まだよくわからないけれど，結局は人に流されないで，自分の道を歩いていかなければならないのだろう。自分の目の前にあるものは，道であって，レールではない。とりあえず，自分のやりたいことを見つけるために，これからは色々なことに挑戦していきたい。

戦争のつくりかた

りぼん・ぷろじぇくと 著

建築学科５年
山　上　寛　子

書店でのこと。絵本のような本にとんでもない題がついている！それは『戦争のつくりかた』この本である。思わずジャケ買い（見た目の印象で買うこと）してしまった。家に帰り，早速ひらく。

――わたしたちの国は，60年ちかくまえに，「戦争しない」と決めました。（中略）でも，国のしくみやきまりをすこしずつ変えていけば，戦争しないと決めた国も，戦争できる国になります。――

とても簡単なおそろしい内容だ。これは実は以前話題になった有事法案成立に対して立ちあがったプロジェクトチームが話し合いを重ねてうまれた本。１ページずつ，ひとつずつ戦争がつくられていく。読み進めていくぶん，大きな不安がおそってくる。それはその内容が60年前，日本が戦争をしていた頃の話そのものだったからだ。今またそれが昔話ではなくなっていることを感じた。法律が変えられていくなかで戦争の準備がはじまっているような気さえする。“法律”や“政治”といったものは私たちの生活にはあまり大きく影響していないように思っていた。あっても消費税ぐらい。そういう意味で平和なこの国。もしこの本のとおりのことが進んでいくと，今の水準で生活できなくなるのは必至。そしていろいろなことに気がつく…。

今，戦争を知らない人たちのほうが多くなっている。もう少し経って，戦争を経験した世代がいなくなってしまった時，私たちはまた歴史を繰り返すかもしれない。戦争を知らない人が増えれば増えるほどその確率も増えているのではないだろうか。私たちは60年前のあの惨状から何を学んだのだろうか。

私は広島に来て，“戦争がおこり，原爆がおとされたこと”に対して慣れすぎているように感じることがある。実はそのことが一番おそろしい。戦争を意識しないということは，もしかしたら戦争に関わることをしていても意識していないことにもなりかねないのではないだろうか。

この小さな本から『戦争のことを学ぶなんて面倒』とは思っていられないことを知らされた。なにせ戦争がおこるほうが面倒なことになるのだから。

――わたしたちは，未来をつくりだすことができます。戦争しない方法を，えらびとることも。――

こうしめくくられている。是非戦争しない方法をえらびとりたい。

戦争のつくりかた。私たちはそれを知っているはず。平和をえらびとるために，私たちは今何をすべきか。

図書館でのマナー

- 図書・資料への書き込み・切抜きなどは，絶対にしないでください。
- 貸し出し図書を他人にまた貸ししないでください。
- 図書を紛失・破損した場合はすみやかにお申し出ください。
- 館内では他人の妨げにならないよう静粛にしてください。
- 携帯電話等の使用はご遠慮ください。
- 館内での飲食は禁止です。

第2回校内読書感想文コンクールを終えて

選考委員・図書館長補
新　美　哲　彦

昨年から校内読書感想文コンクールが始まった。今回が第二回である。今回も前回同様の選考方法を採用した。1，2年生の優秀作品は，これも前回同様，担当委員が選んだ上位作品を学生の投票で絞り込んだ。

昨年，この学校に着任した時，理系の学校だから国語の授業には興味を持たないのではないか，読書をしている子も少ないのではないか，と不安に思っていた。これは高専卒の義母に「国語の時間は寝る時間♪」と豪語されていたためでもある。

だが初めの授業で行った「最近どんな本を読んだか」というアンケートで，その不安はだいぶ消えた。このアンケート結果は国語科ＨＰに載せてある（http://www.kure-nct.ac.jp/dept/gene/kokugo/index.htm）。数ヶ月間，一冊も読んでいない子も確かにいたが，さまざまな本をみんな読んでいるのだ。本を読むことが半ば仕事になってしまっていた私も，このアンケートが刺戟になって，ふたたび本を楽しんで読むようになった。これは前回の「図書だより」に書いた通りである。この一年半ほど高専で授業をしたが，高い能力を持つ学生に驚かされることも多く，初めに抱いていた不安はほとんどなくなっている。

読書感想文の審査も，高専生の高い能力や感受性を見る楽しみの一つであり，すばらしい作品に胸を打たれることも多い。今回の優秀作品は，例年以上のレベルではないだろうか。読書感想文を審査した学生に「そこらへんの本より余裕でおもしろかった」という感想があったが，それがうなづける出来映えである。読書感想文を泣きながら読んだのも初めての体験であった。その感想文もこの冊子に載っている。どの感想文も，読んだ時，自分に突き刺さってくる何かを持った作品ばかりである。みなさんにもぜひ読んでいただきたい。

なお，惜しくも優秀作品には選ばれなかったものの優れている作品を上記の国語科ＨＰに載せている。これも併せて参照して欲しい。

留学生が紹介する外国の図書館

私の国の図書館を紹介します

電気情報工学科３年
チャンウィライ・ソムバット

私は高校生時代まで図書館に入ったことがありませんでした。読書が嫌いなわけではなく，入る機会がなかったのです。私の住んでいた所は都市から離れていて図書館なんかまったく存在しないのです。学校は教室の建物以外，何もありませんでした。そのため，教科書以外には新聞や雑誌ぐらいしか読めませんでした。私が図書館と出会ったのは大学に入ったときでした。

ラオスの首都ビエンチャンにあるたった一つの大学で，ラオス国立大学（National University of Laos）といいます。今回この大学の図書館を紹介したいと思います。

ラオスの図書館は日本の図書館ほど便利ではありませんが，この大学の図書館を利用している人にとってはかなり満足できると思います。大学の各学科にも小さい図書館はありますが，最も大きいのは中央図書館（Central Library）です。三階建てのラオス風の建物です。建物の一階は事務室と利用する人のかばんや荷物を預かるところがあります。図書館内はかばん持ち込み禁止となっています。二階と三階は図書室です。図書室の中には本棚が並んでいて各分野やいろんな知識の本が集まっています。本は分野や言語によって分かれています。ラオス語と英語の他にもいろんな言語があります。例えば，フランス語，ロシア語，ドイツ語，タイ語等があります。ほとんどの本は借り出し可能です。一週間三冊以内借りることが出来ます。勉強するための本以外にも，新聞や雑誌を読むことが出来ます。他にパソコン室があり，インターネットにアクセスすることも出来ます。図書館内では私語禁止なのでとても静かです。勉強や読書するだけでなく，リラックスする場所としてもいいと思います。

私はラオス国立大学に通っている間によく図書館を利用しました。この図書館のおかげでいろんな事を学ぶことが出来たと思います。自分が勉強している専攻の本が全部あるし，専攻以外の面白い知識も揃っています。私は図書館が大好きで一日何時間も図書館で過ごしたこともあります。

ブックハンティング

第二回ブックハンティングを終えて

機械工学科３年　原田辰也

先日，第二回ブックハンティングが行われ，私は前回に引き続き参加した。前回は参加予定者のほとんどが文化委員であり，欠席者も多かった。しかし，今回はクラスごとに希望者を選んだため，欠席者も少なく，多くの人がブックハンティングを知ることになったと思う。一方，クラスによっては全体でブックハンティングについて説明せずに，文化委員が本の好きそうな人を選んだところもあるようだ。来年もまた行われたときは，全体でブックハンティングについて説明し，より多くの人が知ることができるようにすべきだと思う。

今回のブックハンティングでひとつ残念に思ったことがある。それは，有名な新しい作品を買っている人が多かったことだ。それによって他の人と作品が重複してしまった人が多くなってしまったからだ。また，図書室にすでにある本と重複してしまった人もいるようだ。このことは，ブックハンティング全体の購入数が，参加者数に比べて少ないことから分かる。

私は，ブックハンティングで買う本には，文庫本が適していると思う。その理由はふたつある。ひとつは多くの種類があり，他の人と重複しにくいことだ。もうひとつは値段が安く，たくさん購入できることだ。

ブックハンティングの目的は，学生が読みたいと思う本をたくさん図書室に置くことだ。よって，図書室にすでにある本や，今後買われそうな本ではなく，あまり知られてはいないが面白いという本を買うべきだろう。来年も行われたときは，多くの人が参加し，個性豊かな本がたくさん購入されると良いと思う。

ブックハンティングの魅力

機械工学科４年　菅原喬史

ブックハンティングは昨年度から実施され，今年で二回目となる。僕は二回とも参加している。ブックハンティングは，非常に楽しい行事である。なぜなら，図書館の本を自分の手で選ぶことができるのだ。

ブックハンティングには，二つのよさがあると僕は思う。まず一つ目は，日ごろ読む機会がない本を選べることだ。例えば一人あたり一万円という予算を学校から与えられるので，自分では買うことができない高価な本でも気軽に選ぶことができる。

次に二つ目のよさは，図書館に入っていない自分の愛読書や好きな作家の作品を選ぶことができることだ。もし自分の大好きな本が図書館に入っていなかったら，多くの人はとても残念に思うだろう。自分の大好きな本を図書館に入れてもらうことで，自分が借りてもう一度その本を楽しむことができると思うし，他の人がその本を手にとる機会を増やすことにもなる。なにより自分の好きな本が図書館にあるというだけでうれしくなると思う。

ブックハンティングには，多くのよさがあるにもかかわらず，その存在を知らない学生も意外と多いようだ。とても残念である。もしこの文章を読んで少しでも興味もった学生がいれば，来年度のブックハンティングにぜひとも参加してほしい。

新任教職員の随想

あの頃ぼくらはアホでした

電気情報工学科
田中　誠

「あの頃ぼくらはアホでした」といっても本の話である。ミステリー作家の東野圭吾氏は，私が編入学した大阪Ｆ大学の２年先輩だった。彼は電気工学科で私は電子工学科だったが，単位の荒稼ぎを目指すＥ田君に誘われて，時間割の空きがあれば電気工学科の４年の講義も取りに行っていた。もしかしたら彼が同じ講義室にいたかもしれない。題名の本は彼の傑作青春記で集英社文庫から出版されている。

後半が当時アホの多かったＦ大学の話なのであるが，実際のところ東野氏は甘い。私の経験したことの方がもっとすさまじかった。たとえば夏合宿では，服のままで風呂にたたき込まれるなどは序の口で，練習の合間にも突然コーチの指示で「布団蒸し」や「飛行機」などのリンチが始まった。極めつけは夜寝ているとマジックで落書きされることである。これはもう寝ずにがんばるか，落書きされるのを覚悟して眠るしかない。中にはパンツを脱がされて落書きされる者もあり，翌日風呂に入って初めて自分が被害にあったことに気がつくのである。犯人のほとんどは部長のＹ本さんで，彼と同じ部屋になった私は，「いくぞ！」の合図で毎夜彼の落書きに付き合うことになった。合宿の出発のとき先輩が，「信州へ旅行に行くつもりでおるんやろ。何も知らんやつは気楽でええなー。」という意味が身にしみて分かるのである。

氏は４年になると似非（えせ）理系人間であることを隠してさっさとＮ社に就職するのであるが，私達はどこかの企業の人事部をうまく騙せるほどの演技力もなく，大半が大学院に進学した。中には博士課程までいって，今では教授をしながら，自分が似非理系人間であることを隠しつづけている者もあるらしい。「恐るべし大阪Ｆ大学」である。諸君，理系の道は険しい。学ぶべきことは多く，しかもいずれも極めて難解である。詳細は表題の本を読んでいただきたい。

読書のすすめ

建築学科
仁保　裕

「読書のすすめ」というタイトルの下，私なりの「読書を楽にする方法」を書きます。

読書を楽にするには，読んでいる本を「面白い」と感じることですが，「面白い」と感じるためには文章を頭の中で映像に置き換えなければなりません。この置き換えは慣れてない人にとって辛いものです。よって，この作業を辛くなくすれば読書はより楽になります。

一番簡単な方法は，映画を見た後，その映画の原作本を読むことです。映画ならば，ストーリーを映像として提供してくれるので楽に映画の世界に浸ることができます。で，映画を見た後，頭の中に残っている映像を頼りに本を読み進めれば，苦痛を感じることなく，本の世界に浸ることができます。「映画で知ったストーリーを本で知る必要はない」と思う学生さんもいるでしょう。ですが，本に詰め込んである情報量は映画のそれを上回ります。本を読めば映画では知りえなかったことを知る事ができ，世界はさらに広がります。

ところで，映画を見るには映画館に行くのが一番ですが，これには１回2000円程度の出費が伴います。ビデオ・DVDをレンタルするのも手ですが，定期的にレンタルすると結構な出費になります。そこでお勧めなのがテレビのロードショーです。必ずしも好みの映画が放映されるとは限りませんが，なんといっても金がかからない点が魅力です。しかも，いくつかのテレビ局が週１回ずつ映画を放映しているので，週数回映画を見ることができます。このようにして，いくつかの映画を見た後，一番楽しめた映画の原作本を探して読んでみることをお勧めします（原作本がない場合はあきらめて他の映画を見てください）。

「映画を見た後，本を読む」方法を是非試してみてください。読書が楽になります。

在外研究員報告

外国の図書館紹介

建築学科助手　冨田英夫

1．新館の開館

9月19日より，待ちに待った新しいヴァイマール・バウハウス大学図書館本館が開館した。というのもこの図書館は計画開始から既に10数年が経っているのである。

これまで，図書の半数程度は前日までにWeb上で注文し徒歩で20分ほどの距離にある旧図書館本館に取りに行く必要があったが，この新本館のおかげで注文して1時間後には徒歩5分の場所で受け取ることが可能になった。近くに校舎がある建築・芸術・情報の3学部の学生にとってはうれしい限りである。なお，バウハウス大は，その3学部に建設（土木）を加えた4学部から構成されており，呉高専の構成に良く似ていることを付け加えておきたい。

2．施設概要

開館時間は平日が9時（火曜は11時）から22時，土曜は10時から18時，日曜は閉館。学生への図書貸し出しは，週末のみ。これらの点では，日本の大学の方が使いやすいと言える。

それでも，研究室の同僚によると，この大学の図書館は使い良いらしい。例えばベルリン工科大学の図書館は順番待ちで注文に数週間かかることや，紛失等で受け取れられないことがよくあるそうなのだ。どうやらバウハウス大は比較的図書の管理は良いようである。

ただ，学問上の基本図書は使い込まれており，結構，痛んでいる。これは使い方が悪いのではなく，単に良く読まれているのだと想像する。

3．設備

さて，新図書館の施設自体は時間をかけただけあって充実している。個室の数，PC末端の数等は日本の大学も劣りはしないが，室内のデザインや雰囲気は，さすが建築家の手が行き届いており美しい。この図書館に限らず，大学の施設全体がデザイン的に一定のレベルを超えている点は，良いデザインを実施するシステムが学内に整っていることの証拠だろう。ちなみに，バウハウス大は全ての公式印刷物の字体（フォント）を統一しており，当然，図書館入口の看板にもその字体が用いてある。

4．教授の背中

私の所属する研究室の教授は大学に研究拠点を置いてない（指導教員は別の人）。そのため，建築の歴史系の研究室にしては研究室所有の図書が極端に少なく，必然的に教授達は図書館で資料収集することになる。教授が地道に資料収集している姿を見るのは印象的である（日本では研究室に必要図書をそろえるので，図書館で教授を見ることは稀であった）。これは単に研究スタイルの違いなのだが，一般の学生にはいい影響を与えると思う。

5．本は財産

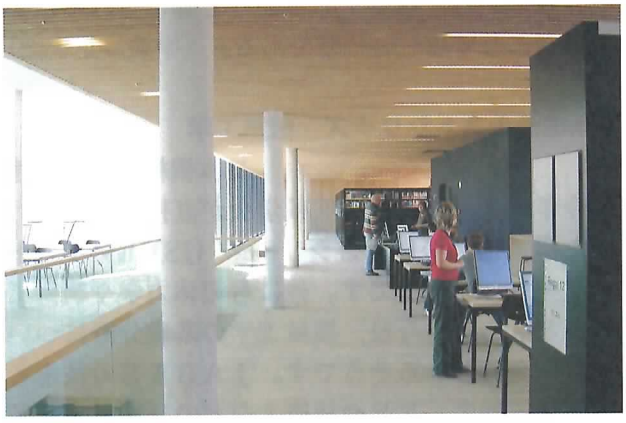
しかし，研究室に図書が少ないことは，私のような拠点を持ってない人間にとっては難しい状況である。確かに図書館には書籍はあるが貸出中のこともある。そのため早い時期から割り切り，独・英の書籍は個人でどんどん買うことにしている。

私の場合，まだ100年程前の建築の歴史を研究している関係で，時間とお金をかければ関係図書も何とか手に入る。それでも時には一冊の本に数万円出費することがある。読もうと思っても図書館や古書市場になかなか無いのである。

工学系の場合，合理的精神が原因するのか，古い雑誌が価値の無いものとしていつの間にか廃棄されていたり，管理が悪かったりするのを目にすることがあるが，残念である。出版後ある時期を過ぎると書籍は極端に入手しにくくなるものである。

その意味で，個人に代わって継続的に図書を購入してくれる図書館は学校の財産であり，そこに収蔵される本は間違いなく，人類共通の財産なのである。

▲　図書館中央のメイン階段と吹抜



▲　2階の建築関係図書のフロア

新着図書10選

ぼくらのサイテーの夏（講談社文庫）

笹生陽子　講談社

一学期の終業式，楽しい夏休み前日。「ぼく」は「栗田」との勝負に負けた上に怪我をしてしまう。さらにその勝負が危険だとして，夏休みのプール掃除の罰まで与えられてしまう。謎めいた同級生「栗田」と，引きこもりの兄を抱える「僕」は，はじめのうちは互いになじめないまま，プール掃除をしているが，徐々に距離が縮まっていき……。家族のあり方，友情，社会などへのあたたかい視線が光る秀作。　（新美　哲彦記）

チョムスキー　9.11 Power and Terror（DVD）

出演：ノーム・チョムスキー，その他

監督：ジャン・ユンカーマン

9・11の同時多発テロ以降，最も重要な「アメリカ批判者」となった言語学者ノーム・チョムスキーを追ったドキュメンタリー。チョムスキーに対するインタビューとチョムスキーの講演で構成されている。テロ直後のアメリカの，あのような状況の中でも，明るく，諦めず，前向きに行動する姿勢に，深く感銘を受けた。最後に付いている鶴見俊輔の解説映像も面白い。　（新美　哲彦記）

はじめての材料力学（第２版）

小山信次・鈴木幸三著　森北出版

材料力学は難しいと感じている学生が多いが，基礎的事項については，本校の２年生までに学んだ物理の力学，数学Ａ・数学Ｂの三角関数，簡単な微分・積分の知識があればほとんど理解できる科目である。本書は，はじめて材料力学を学ぶ学生向けの教科書として執筆されたものであり，内容も易しく，演習問題の解答についても詳細に説明されている。基礎をしっかりと身に付けるために参考にしてほしい一冊である。（中迫　正一記）

JSMEテキストシリーズ　伝熱工学

日本機械学会　丸善

今年の３月に，日本機械学会が直接編集し発行した機械工学の専門書シリーズ（JSMEテキストシリーズ）の一つです。他にも流体力学や制御工学などもあり，今後，機械工学の基礎分野について続々発行されるそうです。ＪＡＢＥＥの技術者教育認定制度，ＦＥや技術士などの技術者認証制度に対応するように演習問題が設定されており，英文の問題が沢山盛り込まれている点が目新しい。また，類似の専門書に比べて値段が千円台ととても安いのには驚きである。しかもＡ４サイズの２色刷りで図が明解かつ豊富である点も嬉しい。早速，伝熱工学については購入し，巧妙な図解を発見しては感心している。　（野村　高広記）

量子のからみあう宇宙

A.D. アグゼル著　水谷淳訳早川書房

20世紀の科学遺産である量子論と相対論を築き上げたアインシュタイン等による自然現象の認識（観測問題）に対し，学際的に貢献してきた人々の成果を分かりやすく紹介している。その論争の結果，ベルの不等式による理論と実験的検証より，量子論に軍配があがった。現在これらの成果は，非局性，量子の絡み合い，量子テレポーテーションとして注目され，最先端技術の基盤として量子暗号・量子情報通信への取り組みが記述されている。　（植田　義文記）

たのしいRuby

―Rubyではじめる気軽なプログラミング―

高橋征義，後藤裕蔵著

ソフトバンクパブリッシング

５年ほど前，僕はまだ大学院生でした。この頃，フリーで安定しているOSとしてLinuxが流行っていました。その当時LUCK（Linux Users group ChugoKu）のオフ会などに参加していました。その宴会でRubyの作者，まつもとゆきひろ氏とお会いしていろいろと熱くかたりあいました。Rubyはフリーのオブジェクト指向のスクリプト言語です。プログラミングに興味のある学生さんにお勧めの一冊です。　（井上　浩孝記）

珠玉のプログラミング

―本質を見抜いたアルゴリズムとデータ構造―

ジョン　ベントリー著，小林　健一郎訳

ピアソン・エデュケーション

プログラマーならば，アルゴリズムが重要であることは誰もが知っている。そしていくつかのアルゴリズムを知っていることだと思います。しかし本書を読むと，なぜアルゴリズムが重要なのか？どうすれば高速化できるのか？わかりやすくなるのか？メモリを減らせるのか？といった疑問が解き明かされていくのです。ページをめくる毎に納得させられます。今までの漠然とした理解ではなく，本質を見抜いた理解に達すると，視界が

開け非常に気持ちがいいものです。(井上　浩孝記)

ひび割れのないコンクリートのつくり方

岩瀬文夫著　日経BP社

コンクリートは建設材料として広く使用されている材料であるが，ひび割れが発生しやすいという欠点がある。現在までコンクリートに関する様々な研究が行われているが，未だコンクリートからひび割れを完全に取り去ることはできない。本書はひび割れのないコンクリート構造物を造るための様々な施工・管理方法について記されている。多少専門的ではあるが，図や写真が多く掲載されているため分かりやすい内容となっている。

(堀口　　至記)

ローカル線に明日はあるか
—実態検証！地方鉄道・路面電車—

浅井康次著　㈱交通新聞社

近年わが国では，鉄道やバスなどの公共交通機関の衰退が著しい。この問題は，人々の移動手段を奪うだけではなく，環境問題など様々な社会問題に波及している。本書は，鉄道やバス路線の廃止が後を絶たない地方部に着目し，ローカル線の現状と展望を解説したものである。経営学や交通計画学等の専門用語の知識も多少必要とされるが，高専生なら十分理解できる内容である。ローカル線問題は社会問題の一つであるため，どの学科の学生にも薦めたい一冊である。

(山岡　俊一記)

アール・デコの建築

吉田鋼市著　中央公論新社

日本で装飾としてのアール・デコ様式を取り入れた建築は，大正末期から昭和初期の建築に見られる。私自身，そうした状況を知ったのは十年位前のことで，それまで日本にアール・デコの建築が存在することすら知らなかった。最近，アール・デコ様式が見直され，インテリアとして取り入れることも多い。著者は長らくアール・デコの建築について研究され，この本はアール・デコの建築について知るには格好の書です。

(岡本　二郎記)

近代建築遺産の継承

三宅理一他編　鹿島出版会

この本は2003年に京都で開催された「日仏都市会議2003—京都シンポジウム」の中で，関西日仏会館の再生事業を通して近代建築遺産の継承について行われたシンポジウムの内容をまとめられたものです。欧米と日本とでは建築遺産の継承に対する意識は異なる。しかしそのことで日本の建築遺産が次々に失われていくのは残念です。ともあれ，この本を一読してみて下さい。(岡本　二郎記)

お　知　ら　せ

1．図書館ホームページがリニューアルしましたので，下記アドレスからアクセスしてみてください。

《http://wwwlib.kure-nct.ac.jp/》

図書館ホームページから，学内専用の電子ジャーナル・データベース等から検索が行えます。

(1)　**電子ジャーナル**

ＳＤ（Science Direct：サイエンスダイレクト）

エルゼビアが提供する世界最大の電子ジャーナルサービスです。エルゼビアグループが発行する1,800以上の科学・技術・医学・社会科学分野のジャーナルのうち約1,000誌のフルテキストが利用できます。

(2)　**データベース**

①　**KANON（カノン）**

約16,000誌の外国雑誌の目次情報を収録し，目次情報から電子ジャーナルへ直接アクセスできます。

②　**MathSciNet**

米国数学会が提供する，世界の数学文献をカバーする包括的な書誌・レビューデータベースです。

③　**JDream**

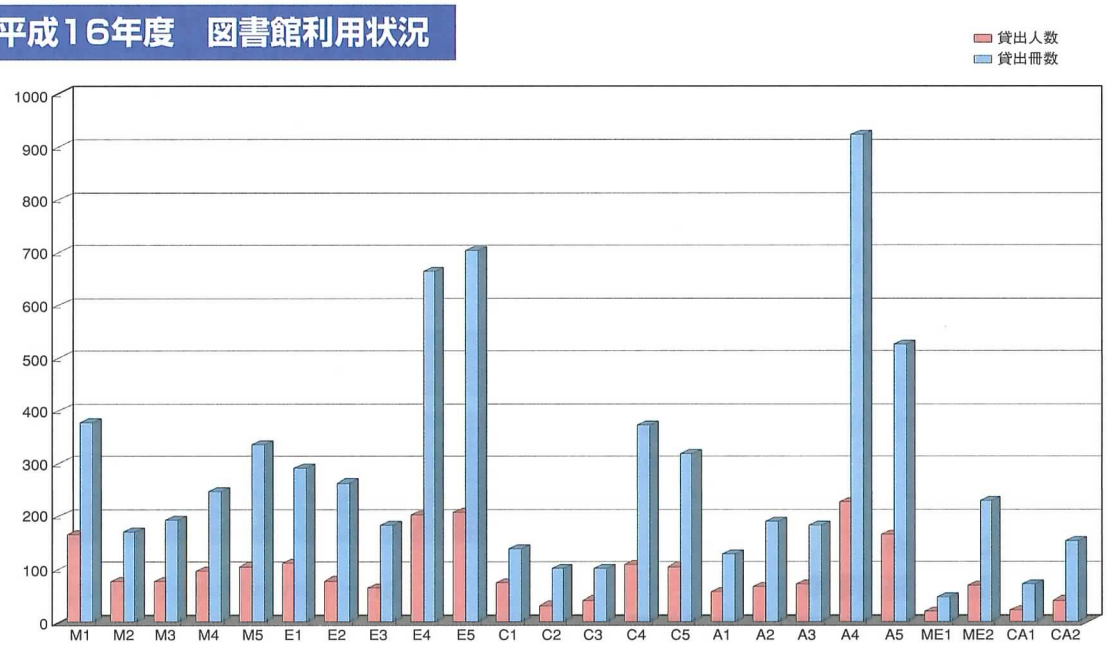
科学技術振興機構（ＪＳＴ）が提供する論文検索型データベースです。世界中から網羅的に収集されており,日本語で検索できます。

④　**CiNii（サイニイ）**

国立情報学研究所（NII）が提供する情報検索サービスです。学協会や大学等発行の研究紀要等の検索ができ，日本の学術論文を中心とした論文情報です。

お　知　ら　せ

2．平成16年度　図書館利用状況



																					専機電		専建設	
学科学年	M1	M2	M3	M4	M5	E1	E2	E3	E4	E5	C1	C2	C3	C4	C5	A1	A2	A3	A4	A5	ME1	ME2	CA1	CA2
貸出人数	165	77	77	97	105	112	78	64	202	207	75	31	41	109	105	58	67	71	228	165	20	70	23	41
貸出冊数	378	170	193	248	335	292	263	182	665	703	139	101	101	373	318	129	191	182	923	525	47	230	72	154

3．第３回呉高専文化セミナーについて

中世の『源氏物語』
—三条西実隆と『源氏物語』—

日　　時：平成18年１月14日㈯
　　午後２時～４時まで
会　　場：阿賀公民館　２階講座室
講　　師：呉高専講師　新美　哲彦
定　　員：80名
参 加 料：無　料
対　　象：一般市民
主　　催：呉工業高等専門学校図書館
申込方法：電話で，１月12日㈭までに下記へお申込みください。
　　呉市文化振興課：（0823）25-3472

4．冬季休業中の長期貸出について

以下のとおり，長期貸出を行いますので，ご利用ください。

貸出中の図書は，継続手続（１回だけ可）を行えば，長期貸出の扱いとなります。

貸出期間　：　12月９日㈮～12月26日㈪
貸出冊数　：　５冊以内
対　　象　：　一般学生，卒研学生，専攻科生
返却期限　：　１月11日㈬

編　集　後　記

去る平成17年７月29日㈮，紀伊国屋広島店にて第２回ブックハンティングが行われました。ブックハンティングは５学年全クラスから１名参加者を募り，１人10,000円分の図書館に入れて欲しい本を選ぶ豪華なイベントです。私も引率教員として同行したのですが，学生ではない私に本を購入する権利はあるはずもなく，皆が楽しそうに本を探している様子を横目で見ながら，寂しく立ち読みをしていました。このイベントの良いところは，お金を出さずに自分の欲しい本が手に入ることです。「読んでみたいけど買うのはなぁ・・・」というような本を手軽に手にすることができますので，興味がありましたら次回のブックハンティングにぜひ参加してみてください。・・・次回は教員も本を選べればいいなぁ（笑）。

（図書館長補　堀口　　至）

（表紙撮影：一般科目教員　新美　哲彦）